

楚遊日記(2)

●崇禎一〇(一六三七)年二月一日(二十九日)二十九日間 徐霞客五十二歲

●訳注稿

第二部 衡陽遭難記(二月十一日(十三日))

〔二月十一日〕

《概要》ようやく出航し、東陽渡などを經過して、新塘站の対岸で停泊。夜半に盜賊団が船に乱入、乗客達を斬り、荷物を奪った。徐霞客はからくも裸身で川に飛び込み、なんとか命は助かった。

■本文の部

十一日

五更復聞雨聲、天明漸霽。

二十五里、南上鉤欄灘、衡南首灘也、江深流縮、勢不甚洶湧。轉而西、又五里爲東陽渡、其北岸爲琉璃廠、乃桂府燒造之窯也。又西二十里爲車江「或作汊江」。其北數里外即雲母山。乃折而東南行、十里爲雲集潭、有小山在東岸。已復南轉、十里爲新塘站「舊有驛、今廢」。又六里、泊於新塘站上流之對涯。同舟者爲衡郡艾行可・石瑤庭、艾爲桂府禮生、而石本蘇人、居此已三代矣。其時日有餘照、而其處止有穀舟二隻、遂依之泊。已而同上水者又五六舟、亦隨泊焉。其涯上本無村落、余念石與前艙所搭徽人俱慣遊江湖、而艾又本郡人、其行止余可無參與、乃聽其泊。迨暮、月色頗明。余念入春以來尚未見月、及入舟前晚、則瀟湘夜雨、此夕則湘浦月明、兩夕之間、各擅一勝、爲之躍然。已而忽聞岸上涯邊有啼號聲、若幼童、又若婦女、更餘不止。衆舟寂然、皆不敢問。余聞之不能寐、枕上方作詩憐之、有「簫管孤舟悲赤壁、琵琶兩袖濕青衫」之句、又有「灘驚迴雁天方一、月叫杜鵑更已三」等句。然亦止慮有詐局、俟憐而納之、即有尾其後以挾詐者、不虞其爲盜也。迨二鼓、靜聞心不能忍、因小解涉水登岸「靜聞戒律甚嚴、一吐二解。必俟登岸、不入于水。」、呼而詰之、則童子也、年十四五、尚未受全髮、詭言出王闔之門、年甫十二、王善酌酒、操大杖、故欲走避。靜聞勸其歸、且厚撫之、彼竟臥涯側。比靜聞登舟未久、則群盜喊殺入舟、火炬刀劍交叢而下。余時未寐、急從臥板下取匣中遊資移之。越艾艙。欲從舟尾赴水、而舟尾賊方揮劍斫尾門、不得出、乃力掀篷隙、莽投之江中、復走臥處、覓衣披之。靜聞・顧僕與艾・石主僕、或赤身、或擁被、俱逼聚一處。賊前從中艙、後破後門、前後刀戟亂戳、無不以赤體受之者。余念必爲盜執、所持紬衣不便、乃並棄之。各跪而請命、賊戮不已、遂一湧掀篷入水。入水余最後、足爲竹緯所絆、竟同篷倒翻而下、首先及江底、耳鼻灌水一口、急踴而起。幸水淺止及腰、乃逆流行江中、得鄰舟間避而至、遂躍入其中。時水浸寒甚、鄰客以舟人被蓋余、而臥其舟、溯流而上三四里、泊於香爐山、蓋已隔江矣。還望所劫舟、火光赫然、群盜齊喊一聲爲號而去。已而同泊諸舟俱移泊而來、有言南京相公身被四創者、余聞之暗笑其言之妄。且幸亂刃交戟之下、赤身其間、獨一創不及、此實天幸。惟靜聞・顧奴不知其處、

然亦以爲一滾入水、得免虎口、資囊可無計矣。但張侯宗璉所著《南程續記》一帙、乃其手筆、其家珍藏二百餘年、而一入余手、遂罹此厄、能不撫膺！其時舟人父子亦俱被戮、哀號於鄰舟。他舟又有石瑤庭及艾僕與顧僕、俱爲盜戮、赤身而來、與余同被臥、始知所謂被四創者、乃余僕也。前艙五徽人俱木客、亦有二人在鄰舟、其三人不知何處。而余艙尚不見靜聞、後艙則艾行可與其友會姓者、亦無問處。余時臥稠人中、顧僕呻吟甚、余念行囊雖焚劫無遺、而所投匣資或在江底可覓。但恐天明爲見者取去、欲味爽即行、而身無寸絲、何以就岸。是晚初月甚明、及盜至、已陰雲四布、迨曉、雨復霏霏。

■ 訳注の部

● 訓訳

五更に復た雨聲を聞く。天明に漸く霽る。

二十五里、南のかた鉤欄灘を上る。衡南の首灘なり。江は深く流れは縮むも、勢甚しくは洶湧ならず。轉じて西し、又た五里にして東陽渡たり。其の北岸は琉璃廠たり。乃ち桂府燒造の窯なり。又た西に二十里にして車江たり「或いは汉江に作る」。其の北數里の外は即ち雲母山なり。乃ち折れて東南に行く。十里にして雲集潭たり。小山の東岸に在る有り。已にして復た南に轉じ、十里にして新塘站たり「舊驛有り、今は廢す」。又た六里にして、新塘站上流の對涯に泊す。

同舟者は衡郡の艾行可・石瑤庭たり。艾は桂府の禮生たり。而して石は本蘇人にして、此に居ること已に三代なり。

其の時日に餘照有り、而して其の處に止まるに穀舟二隻有り、遂に之に依りて泊す。已にして同じく水を上る者又た五六舟ありて、亦た隨ひ泊す。其の涯の上にはもと村落無し。余念ふ、石と前艙に搭する所の徽人とは俱に江湖に遊ぶに慣れ、而して艾も又た本郡の人なれば、其の行止に、余は參與すべき無し、と。乃ち其の泊を聽す。

暮れに迨び、月色頗る明かなり。余念ふ、春に入りて以來、尚ほ未だ月を見ず、と。及び舟に入るの前晩は、則ち「瀟湘夜雨」にして、此の夕は則ち「湘浦月明」なり。兩夕の間、各々一勝を擅にす。之が爲に躍然たり。

已にして忽ち聞く、岸上の涯邊に啼號の聲有るを。幼童の若く、又た婦女の若し。更餘にして止まず。衆舟は寂然として、皆敢へて問はず。余之を聞き寐ぬる能わず。枕上に方に詩を作りて之を憐まんとす。「簫管孤舟悲赤壁」「琵琶兩袖濕青衫」の句有り、又た「灘驚廻雁天方一」「月叫杜鵑更已三」等の句有り。

然れども亦た止だ詐局有るかと慮り、憐みて之を納るれば、即ち其の後に尾するに詐を挾む者を以てする有るかと俟つ。其の盜たるを虞らざるなり。

二鼓に迨び、靜聞心に忍ぶ能はず、小解に因りて水を涉りて岸に登る「靜聞戒律甚だ嚴にして、一吐一解にも、必ず岸に登るを俟ち、水に入れず」。呼して之を詰へば、則ち童子なり。年十四五、尚ほ未だ全髪を受けず。詭りて言ふ、「王闔の門を出づ。年甫めて十二。王善く酌酒し、大杖を操る。故に逃げ避けんと欲す」と。靜聞其の歸るを勧め、且つ厚く之を撫す。彼竟に涯の側に臥す。

靜聞の舟に登る比ひ、未だ久しからずして、則ち群盜「殺す」と喊して舟に入る。火炬刀劍、交叢して下る。

余時に未だ寐ねず。急ぐ臥板の下より匣中の遊資を取り之を移さんとす。艾の艙を越え、

舟尾より水に赴かんと欲するも、而して舟尾は賊方に劍を揮つて尾門を斫り、出づるを得ず。乃ち力めて篷隙を掀げ、莽にして之を江中に投ず。復た臥處に走り、衣を覓めて之を披る。靜聞顧僕と艾石の主僕と、或いは赤身、或いは擁被、俱に一處に逼聚す。賊は前は中艙よりし、後は後門を破り、前後刀戟亂戳し、赤體を以て之を受けざる者無し。余念ふ、必ず盜の執るところとならん、と。持する所の紬衣は便ならず、乃ち並びに之を棄つ。各々跪きて命を請ふも、賊戳して已まず。遂に一湧し、篷を掀げて水に入る。水に入るは余最も後れ、足竹緯の絆する所となり、竟に篷と同一に倒翻して下る。首先に江底に及び、耳鼻水を灌ぐこと一口なり。急く踴りて起つ。幸ひに水は浅くして腰に及ぶに止まる。乃ち流れに逆ひて江中を行き、鄰舟の間かに避けて至るものを得。遂に躍りて其の中に入る。時に水に浸りて寒甚し。鄰客舟人の被を以て余を蓋ふ、而して其の舟に臥ず。流れを溯りて上ること三四里、香爐山に泊す、蓋し已に江を隔つるなり。

還つて劫めらるる所の舟を望まば、火光赫然たり。群盜一聲を齊喊し號をなして去る。已にして同泊の諸舟俱に泊を移して來る。南京の相公身に四創を被ると言ふ者有り。余之を聞き其の言の妄なるを暗笑す。且つ幸ひに亂刃交戟の下にありて、身を其の間に赤し、獨だ一創も及ばざるは、此れ實に天幸なり。惟だ靜聞・顧奴は其の處を知らず、然れども亦た以爲ふ、一滾に水に入れば、虎口を免るるを得ん。資囊は計無かるべし。

但だ張侯宗璉の著する所の《南程續記》一帙は、乃ち其の手筆にして、其の家の珍藏すること二百餘年なり。而して一たび余の手に入り、遂に此の厄に罹る、能く撫膺せざらんや。

其の時舟人父子も亦た俱に戳さる。鄰舟に哀號す。他の舟は又た石瑤庭及び艾僕と顧僕と、俱に盜に戳され、赤身にして來り、余と共に被に臥す。始めて知る、謂ふ所の「四創せらるる者」は、乃ち余が僕なり。前艙の五徽人は俱に木客にして、亦た二人の鄰舟に在る有りて、其の三人は何れの處なるかを知らず。而して余が艙は尚ほ靜聞を見ず。後艙は則ち艾行可と其友の曾姓なる者と、亦た問ふ處を知らず。余時に稠人の中に臥す、顧僕呻吟すること甚し。余念ふ、行囊は焚劫せられて遺す無しと雖も、投ずる所の匣資は或いは江底に在りて覓むべけん。但だ恐るは、天明にしては見る者の取去するところとならんことを。味爽に即ち行かんと欲するも、而も身に寸絲無く、何を以て岸に就かん。

是の晩、初め月甚だ明かなり。盜の至るに、已に陰雲四布す。曉に迨び、雨復た霏霏たり。

● 語注

○天明 明け方。

○轉而西 地図によれば、東陽渡は転回点から南の方角である。

○東陽渡 「清泉県志」に見える。東陽渡鎮が「長沙」図・「衡陽城」図、現代地図に見える。

○琉璃廠 「衡陽城」図には、湘江南岸の東陽渡の東に「兵工廠」が見える。

○燒造之窯 黄坤は「燒造器物的窯」、任国瑞等は「燒造各種器皿的窯子」と訳す。名前が琉璃廠とあれば、硝子工房か。

○車江 車江渡・車江橋が「清泉県志」に見える。車江鎮が「衡州」図・「車江」図、現代地図に見える。

- 雲集潭 雲集潭渡が「清泉県志」に見える。雲集鎮が現代地図に見える。
- 新塘站 新塘站渡が「清泉県志」に見える。「長沙」図・「車江」図、小図1・2に見える。考察図集は「車江↓新塘站↓集雲潭」の順で記すが、外邦図や現代地図によれば「車江↓新塘埠↓集雲鎮↓新塘站」となっている。考察図集は「新塘埠」と「新塘站」とを取り違えているのであろう。地図では修正した。
- 艾行可・石瑤庭 不詳。
- 禮生 祭祀を司る官。
- 蘇人 蘇州出身者。
- 本無村落 近く引村落があれば安全で安心だが、村落も無い場所、則ち人里離れた場所なので、盗賊や泥棒が潜んでいてもおかしくない、ということか。
- 遊江湖 各地を旅行しており旅慣れているということ。
- 瀟湘夜雨 「瀟湘八景」の一つ。川辺の夜の雨の景色。「瀟湘八景」は瀟湘地域の名勝を数え上げたもの。
- 湘浦月明 「瀟湘八景」をもじったのであろう。湘江のほとりの明月の光。
- 簫管孤舟悲赤壁 これらは、徐霞客の試作であろうか。この句「簫管孤舟 赤壁に悲しむ（一艘の舟から漂い出る笛の音が、赤壁に悲しげに鳴り響く）」とでも読むか。黄琬は、蘇軾《前赤壁賦》から「客有吹洞簫者、……舞幽壑之潛蛟、泣孤舟之嫠婦（寡婦）」の句を引く。
- 琵琶兩袖濕青衫 この句「琵琶に兩袖青衫を濕ほす（琵琶の音に失意の官人は兩袖を涙でぬらす）」とでも読むか。黄琬は白居易《琵琶引》から「座中泣下誰最多、江州司馬青衫濕。」の句を引く。
- 灘驚迴雁天方一 この句「灘に驚く迴雁、天方に一なり（迴雁峯で灘の水音が激しく鳴る、時はまさに一更）」とでも読むか。黄琬は、《全唐詩》卷七八四所収の、衡州舟子《吟》「野鵲灘西一櫂孤、月光遙接洞庭湖。堪嗟迴雁峰前過、望斷家山一字無。」の一詩を引く。
- 月叫杜鵑更已三 この句「月に叫ぶ杜鵑、更已に三なり（ホトトギスが月に向かって鳴いている、時は已に三更）」とでも読むか。黄琬は、《全唐詩》卷六七九崔塗《春夕旅懷》^{*}「胡蝶夢中家萬里、杜鵑^{*}枝上月三更。」の句を引く。
- ^{*}1…現行本作「春夕」。「二本下有旅懷二字」と注する。
- ^{*}2…現行本作「子規」。「二作杜鵑」と注する。
- 詐局 人をだます策略。
- 俟 待つ、待ち受ける。予想する、か。
- 尾 あとからついてくる。
- 虞 予想する。
- 二鼓 午後十時頃。
- 小便 小便。
- 一吐 痰を吐く。
- 一解 解は汗をかいたり、大小便を排泄すること。ここでは小便をすること。
- 全髮 黄琬は「古代男子年十六留髮、以示成人。」と注す。
- 王闡 闡は宦官。王という姓の宦官。
- 酗酒 酒に酔って荒れ狂う。

- 喊殺 殺の字が落ち着かない。「殺すぞ」と叫ぶか。
- 臥板下 寝床としていた板の下が収納場所となっているのであろう。
- 艙 船室。
- 斫尾門 尾門が不詳。塞いで通れなくしている、の意か。
- 篷 船篷。竹やカヤで編んだ小舟の屋根。
- 莽 粗雑なさま。あわてて、早々に。
- 披 はおる、着る。
- 戳 殺戮。刺すの意味もある。適宜訳し分けた。
- 爲盜執 物を奪われるばかりではなく、命をも執られるとしているのではないか。
- 紬衣 絹織物。
- 竹緯 緯は船を引っ張る綱。竹緯で、竹製の船具であろう。
- 絆 つなぎ止める。
- 一口 口いっぱい。
- 間 秘密裏に、こっそりと。
- 被 ふとん、夜具。
- 臥其舟 臥の主語を黄珮は隣客とし、任国瑞等は徐霞客とする。今任国瑞等に従う。
- 齊喊一聲 一斉に声を上げる。ときの声を上げたのである。
- 南京相公 南京は江陰を含み、相公は紳士、知識人。徐霞客のこと。
- 暗 ひそかに、こっそりと。
- 一滾 滾は湯が沸く、水が沸き立つ。一滾で、一緒にドブンと飛び込んだ、くらいか。
- 張侯宗璉 「江右遊日記」十二月一日条に張侯としてあり。「再掲」一三七四年〜一四二七年。字は重器、江西吉水の人。永樂二年（甲申、一四〇四）の進士。諸官を歴任し、南京大理丞に至ったが、宣德二年（丁未、一四二七）帝意に逆らい、常州同治に左遷される。しかしこの地で善政を敷き、民を軍務につくことから擲った。しかし同年、病没した。郡民の白衣冠して哭送するもの数千人に上り、江陰の君山に廟を建てて祀った。「明史」卷二八一本伝。光緒「江陰県志」卷十五名宦。この廟が廃れていたのを、天啓四年（一六二四）に再建している。「江右遊日記」十二月一日条に、吉水県城に張侯の子孫を訪ね、また同十三日から十八日まで、西園に張侯の本家を訪ねて宴をした記事がある。
- 《南程續記》 不詳。「遊記」によれば張宗璉の草稿本。張侯の本家を訪ねたことを記す「江右遊日記」には記載がないが、その折りに子孫から贈呈されたのではないか。
- 撫膺 膺むねをなでる、慨嘆・悲憤のさま。
- 木客 樵だが、木材を扱う商人か工人だろう。
- 稠人 衆人、大勢の人。

● 口語訳

〔十一日〕

《8》 舟航で新塘站対岸に泊

五更（午前四時頃）に復た雨音を聞く。明け方に次第に晴れてきた。

舟は二十五里進み、南の方へ鉤欄灘を上りこえる。ここは衡陽南の最初の早瀬である。湘江は深く川幅が狭くなっているが、水勢はとても沸き立っているというほどではない。

西（南？）に転じ、さらに又た五里で東陽渡である。この北岸は琉璃廠である。ここは桂王府の工房である。さらに又た西に二十里で車江である「あるいは汧江と書く」。ここから北数里のところ雲母山がある。

車江で曲がって東南に行く。十里で雲集潭である。東岸に小山がある。雲集潭で再び南に転じ、十里で新塘站である「もと駅があったが、今は廃止されている」。さらに又た六里進み、新塘站上流の対岸に停泊する。

同舟の者は衡州郡の艾行可と石瑤庭である。艾は桂王府の祭祀官である。石の方は、元々は蘇州の人で、衡州に居住しているから既に三代になるという。

その時、太陽はまだ残照があった。この場所には他に穀物を載せた舟が二艘停泊していた。それに続いて舟を止めた。さらに我々と同じように湘江を遡ってきた舟が五六艘あり、それらも我が舟のあとについて停泊した。停泊したところの岸壁の上には村落はなかった。（人里離れたところなので危険かなとは思ったが）、石瑤庭と前の舟に搭乘していた徽州出身の人は、いずれも各地を旅行して旅慣れており、また艾行可も地元の人なので、どこが安全で停泊するのによく、どこが危険でスルーすべきかについては（彼らに従えばよく）、私は意見を述べて関与するべきではない、と考えた。そこでこの地に停泊することを容認した。

暮れに及び、月の光がとても明るく輝いている。私は思った、新春に入ってから、まだ月を見たことがなかった、と。また舟に入った前の晩は、いわゆる「瀟湘夜雨」の状況であり、「夜雨」の情景を楽しみ、今日の夕べは「湘浦月明（湘江のほとりの月明かり）」の状況で、「月明」の情景を楽しめた。二晩は、それぞれ別の景勝をほしいままに楽しめた。このためところが踊るのを禁じ得なかった。

《9》強盗の襲撃

●対岸の怪しい泣き声

しばらくして、ふと、岸のほとりの水辺あたりでむせび泣く声があるのが聞こえてきた。幼児のようでもあり、女性のようにもあつた。一更（二時間）あまりしても止まない。停泊している舟はシンとしていて声なく、事情を問おうとするものはいなかった。私はこの声を聞いて眠ることができなかった。

床の中で、詩を作ってこれを憐もうと考えた。そして「簫管孤舟悲赤壁」「琵琶兩袖濕青衫」の句や、「灘驚廻雁天方一」「月叫杜鵑更已三」といった句を作った。

しかし、泣き声については、人をだます策略があるのではないかと心配し、だれか他の人が、泣いている者を憐んで舟に導き入れれば、策略をたくらむものがそのあとに続いてやってくるだろう、と考えた。しかし、それが強盗であるとは予測もつかなかった。

●静聞のやさしさが仇に

午後十時頃になると、静聞は（泣き声を見無視するという）我慢ができなくなり、小便を理由に岸に登った「静聞は戒律を大變厳しく守る人で、痰を吐いたり小便をしたりするのに決して川にはしなかった」。静聞が泣くものに声をかけて問うと、それは童子であつた。年の頃は十四五才で、まだお下げ髪だった。

その子が嘘をついて言った「王宦官の家から逃げてきました。年は十二才になったばかりです。王は酒乱で、酔うと大きな杖をふるって虐待するのです。そこで逃げ出して暴力を避けようとしているのです」と。静聞は王の家に帰った方がよいと勧め、加えて彼を優

しくいたわり慰めた。その子は、また岸辺で眠ってしまった。

●強盗の襲来

静聞が舟に戻ってから、あまりたたないうちに、群盗が「殺すぞ！」と叫びながら舟に乗り込んできた。松明と刀剣とが乱舞し、刺したり斬ったりした。

私はそのときまだ眠っていなかった。急いで、寝床の板の下から旅費の入った函を取り出し、他の場所へ移そうとした。艾行可の船室を通りすぎ、船尾から川に向かおうと思っただが、船尾は盗賊がちょうど剣を振り回して塞いでおり、そちらから出ることはできなかった。そこで力をこめて船の屋根に隙間を拡げて、早々に函を川へ投げ込んだ。

再び寝室に走り、衣服を探して身につけた。静聞と顧僕、艾氏石氏の主従たちは、あるものは裸身で、あるものは夜具にくるまって、みんなして船の一角に集まり固まっていた。

盗賊は前方からは中程の船室から侵入し、うしろからは後門を破って乱入し、前後から刀戟をめちゃくちゃに振り回して殺戮を行い、船の人々は裸身に近い状況であり被害を受けないものはいないというありさま。

●必死の脱出

私は考えた、このままではきっと盗賊になにもかも、命も執られてしまうだろう、と。持っている絹織物などは逃げるのに邪魔になるので、すべて捨てた。

人々は跪いて命だけはと請うも、盗賊どもは殺戮をやめない。私たちは、遂に船室から外へ飛び出し、船の屋根をかかげ拡げて、そこから川に飛び込んだ。飛び込むのは私が最も遅れ、しかも足が船具に絡まり、ついに壊れた屋根と一緒に、逆さまになって転落した。頭が先に河底にいたり、耳も鼻も水でいっぱいになった。急いで躍り上がって立つと、幸いにも水深は浅く、腰くらいであった。そこで流れに逆らって川を遡及し、こっそりと逃げて別のところに避難している隣船にたどり着いた。

そこで飛び込むようにしてその船に乗り込んだ。その時長く川に浸っていたので、ひどく凍えていた。その隣船の客が、船人の夜具を私に掛けてくれ、私はその船の中に臥せった。船は流れを三四里ほど遡り、香爐山の麓で停泊した。思うに、湘江の対岸であろう。

●事件の振り返り

振り返って襲われた船を眺めてみると、炎が赤々と燃えていた。群盗たちは一斉に怒号（ときの声）をあげ、それを合図に立ち去った。まもなく同じところに停泊していた他の船もこちらに移動してきた。そして「南京の大夫である徐霞客さんが、身に四つの創を受けた」と言うものがいた。私はこれを聞き、そのでたらめさに苦笑した。しかし考えてみると、幸いなことに、刃物が乱暴に振り回され交錯するところに身をさらしながら、結局一創すらも受けなかったわけで、これは本当に天与の僥倖と言わざるを得ない。

ただ静聞と顧僕についてはどこでどうしているのか、分らない。けれどもこう考えた、一緒にドボンと川に飛び込んだはずなので、きっと虎口を免れることができているにちがいない、と。荷物についてはどうしようもなからう。

●書籍の亡逸を嘆く

ただ張侯宗璉が著した《南程續記》一帙は、とりもなおさず張侯の手筆で、オリジナルがひとつあるだけのものであり、その家に二百年あまり珍藏されていたものだ。それが一たび私の手に渡ったところで、遂にこの災難にあったのである。嘆き、憤らないわけにはいかない。

●被害を受けた人々

この時、船人の父子もみな盗賊に殺された。隣の船には悲しみ泣き叫ぶ声でいっぱいだった。他の船はといえば、石瑤庭と、艾行可の下僕と顧僕らは、皆盗賊に襲われ刺され傷けられ、身ひとつでこの船に逃れてきて、私と一緒に夜具に伏した。そこで始めて分かった、「四創せらるる者」というのは私の下僕の顧僕のことだったのだ。

前の船室にいた五人の徽州商人は皆木材を扱う商人であった。そのうち二人は、この隣船に逃れてきていて、残りの三人についてはその所在（や生死）が分からない。そして私の船室のものではなお静聞が行方知れずである。

うしろの船室では艾行可とその友人の曾姓なる者がいたが、彼らについてもまたどうであるのか分からない。

●荷物の算段

私はその時、大勢の人たちの中で臥していた。隣では顧僕が苦しみの声を上げている。その中で私は考えた、行李は燃やされあるいは強奪されてもはや無くなっているとしても、川に投げ込んだ旅費の入った函は、もしかすると河底にあって、探し求めることができるかもしれない、と。ただし、明るくなってからだと、函を回収しようとしているところを誰かに見られ、奪われてしまうかもしれない、と心配になった。そこで明け方になってすぐに取りに行こうかと考えたが、今や私は一糸まとわぬ姿である、どうやって岸にあがったらよいか分からない。

この晩は、初めは月がとても明かだった。盗賊がやってくるころには、已に四面に雲が立ちこめていた。明け方になると、雨が再びしとしとと降り始めた。

「一月十二日」

《概要》賊の襲撃から一夜明け、生き残った霞客らは、はぐれた仲間を探しながら、ボロボロになってようやく衡陽城へ戻った。

■本文の部

十二日

鄰舟客戴姓者、甚憐余、從身分裏衣・單褲各一以畀余。余周身無一物、摸髻中猶存銀耳挖一事、「余素不用髻簪、此行至吳門、念二十年前、從閩返錢塘江澚、腰纏已盡、得髻中簪一枝、夾其半酌飯、以其半覓輿、乃達昭慶金心月房。此行因換耳挖一事、一以縮髮、一以備不時之需。及此墮江、幸有此物、髮得不散、艾行可披髮而行、遂至不救。一物雖微、亦天也。」遂以酬之、勿勿問其姓名而別。時顧僕赤身無蔽、余乃以所畀褲與之、而自著其裏衣、然僅及腰而止。旁舟子又以衲一幅畀予、用蔽其前、乃登涯。涯猶在湘之北東岸、乃循岸北行。時同登者余及顧僕、石與艾僕並二徽客、共六人一行、俱若囚鬼。曉風砭骨、砂礫裂足、行不能前、止不能已。四里、天漸明、望所焚劫舟在隔江、上下諸舟、見諸人形狀、俱不肯渡、哀號再三、無有信者。艾僕隔江呼其主、余隔江呼靜聞、徽人亦呼其侶、各各相呼、無一能應。已而聞有呼予者、予知爲靜聞也、心竊喜曰：「吾三人俱生矣。」亟欲與靜聞遇。隔江土人以舟來渡余、及焚舟、望見靜聞、益喜甚。於是入水而行、先覓所投竹匣。靜聞望而問其故、遙謂余曰：「匣在此、匣中之資已烏有矣。手摹《禹碑》及《衡州統志》

猶未沾濡也。」及登岸、見靜聞焚舟中衣被竹笈猶救數件、守之沙岸之側、憐予寒、急脫身衣以衣予、復救得余一褲一襪、俱火傷水濕、乃益取焚餘熾火以炙之。其時微客五人俱在、艾氏四人、二友一僕雖傷亦在、獨艾行可竟無蹤跡。其友・僕乞土人分舟沿流捱覓、余輩炙衣沙上、以候其音。時饑甚、鍋具焚沒無餘、靜聞沒水取得一鐵銚、復沒水取濕米、「先取乾米數斗、俱爲艾僕取去。」煮粥遍食諸難者、而後自食。迨下午、不得艾消息、微人先附舟返衡、余同石・曾・艾僕亦得土人舟同還衡州。余意猶妄意艾先歸也。土舟頗大、而操者一人、雖順流行、不能達二十餘里、至汨江已薄暮。二十里至東陽渡、已深夜。時月色再明、乘月行三十里、抵鐵樓門、已五鼓矣。艾使先返、問艾竟杳然也。

先是、靜聞見余輩赤身下水、彼念經笈在篷側、遂留、捨命乞哀、賊爲之置經。及破余竹撞、見撞中俱書、悉傾棄舟底。靜聞復哀求拾取、仍置破撞中、盜亦不禁「撞中乃《一統志》諸書及文湛持・黃石齋・錢牧齋與余諸手柬、并余自著日記・諸遊稿、惟與劉愚公書稿失去。」繼開余皮廂、見中有尺頭、即闔置袋中攜去。此廂中有眉公與麗江木公敘稿、及弘辨・安仁諸書、與蒼梧道顧東曙輩家書共數十通、又有張公宗璉所著《南程續記》、乃宣德初張侯特使廣東時手書、其族人珍藏二百餘年、予苦求得之。外以莊定山・陳白沙字裏之、亦置書中。靜聞不及知、亦不暇乞、俱爲攜去、不知棄置何所、眞可惜也。又取余皮掛廂、中有家藏《晴山帖》六本、鐵針・錫瓶・陳用卿壺、俱重物、盜入手不開、亟取袋中。破予大筒、取果餅俱投缸底、而曹能始《名勝志》三本・《雲南志》四本及《遊記》合刻十本、俱焚訖。其艾艙諸物、亦多焚棄。獨石瑤庭一竹笈竟未開。賊瀕行、輒放火後艙。時靜聞正留其側、俟其去、即爲撲滅、而余艙口亦火起、靜聞復入江取水澆之。賊聞水聲、以爲有人也、及見靜聞、戮兩創而去、而火已不可救。時諸舟俱遙避、而兩穀舟猶在、呼之、彼反移遠。靜聞乃入江取所墮篷作筏、亟攜經笈並余燼餘諸物、渡至穀舟；冒火再入取艾衣・被・書・米及石瑤庭竹笈、又置篷上、再渡穀舟；及第三次、則舟已沈矣。靜聞從水底取得濕衣三・四件、仍渡穀舟、而穀（舟）乘黑暗匿袖衣等物、止存布衣布被而已。靜聞乃重移置沙上、穀舟亦開去。及守余輩渡江、石與艾僕見所救物、悉各認去。靜聞因謂石曰：「悉是君物乎？」石遂大詬靜聞、謂：「衆人疑爾登涯引盜「謂訊哭童也」。汝眞不良、欲掩我之篋。」不知靜聞爲彼冒刃・冒寒・冒火・冒水、奪護此篋、以待主者、彼不爲德、而反詬之。盜猶憐僧、彼更勝盜哉矣、人之無良如此！

■ 訳注の部

● 訓訳

十二日

鄰舟の客戴姓なる者、甚だ余を憐み、身より裏衣・單褲各一を分かち以て余に畀ふ。余周身一物無く、髻中を摸るに猶ほ銀耳挖一事を存す「余素より髻簪を用いず。此の行呉門に至るに、二十年前を念ふ、閩より錢塘江の澚に返るに、腰纏已に盡く。髻中の簪一枝を得て、其の半を夾みて飯の酌い、其の半を以て輿を覓め乃ち昭慶の金心月の房に達す。此の行は因りて耳挖一事に換へ、一は以て髪に縮（さ）し、一は以て不時の需に備ふ。此の江に墮つるに及び、幸ひに此の物有りて、髪は散ぜざるを得。艾行可は披髪にして行くも、遂に救はれざるに至る。一物微なりと雖も、亦た天なり。」遂に以て之に酬ゆ。匆匆に其の姓名を問ひて別る。時に顧僕も赤身にして蔽ふ無し。余乃ち昇へらるる所の褲を以て之に與へ、而して自らは其の裏衣を着る。然れども僅に腰に及びて止む。旁の舟子又た納

一幅を以て予に昇ふ。用つて其の前を蔽ふ、乃ち涯に登る。

涯は猶ほ湘の北東岸に在り。乃ち岸に循ひて北に行く。時に共に登る者は、余及び顧僕、石と艾の僕、並びに二徽客にして、共に六人の一行にして、俱に囚鬼の若し。曉風骨を砭し、砂礫足を裂き、行くに前む能はず、止まるに已む能はず。四里にして、天漸く明かにして、焚劫せらるる所の舟の江を隔つるに在るを望む。上下の諸舟、諸人の形状を見、俱に渡るを肯んぜず。哀號すること再三なるも、信有る者無し。艾の僕は江を隔てて其の主を呼び、余は江を隔てて靜聞を呼び、徽人も亦た其の侶を呼ぶ。各各相ひ呼ぶも、一の能く應ずる無し。

已にして予を呼ぶ者有るを聞く。予靜聞たるを知るなり。心に竊かに喜びて曰く「吾が三人俱に生けり」と。亟に靜聞と遇はんと欲す。江を隔つるの土人舟を以て來り余を渡す。焚せる舟に及び、靜聞を望見し、喜を益すこと甚し。ここにおいて水に入りて行き、先ず投ずる所の竹匣を覓めんとす。靜聞望みて其の故を問ひ、遙かに余に謂ひて曰く「匣は此に在り。匣中の資は已に烏有せり。手摹の《禹碑》及び《衡州統志》は猶ほ未だ沾濡せざるなり」と。岸に登るに及び、靜聞の焚舟中の衣被竹笈、猶ほ數件を救ひ、之を沙岸の側に守るを見る。予の寒きを憐れみ、急に身衣を脱して予に衣す。復た余の一褲一襪を救ひ得。俱に火傷水濕にして、乃ち益々焚餘の熾火を取りて以て之を炙る。

其の時、徽客五人は俱に在り。艾氏の四人は、二友一僕は傷つくとも雖も亦た在り、獨り艾行可のみ竟に蹤跡無し。其の友と僕と、土人に乞ひて舟を分ちて流れに沿ひて捱覓す。余が輩は衣を沙上に炙り、以て其の音を候つ。

時に饑うるに甚しきも、鍋具は焚没して餘無し。靜聞水に没して一鐵銚を取り得、復た水に没して濕米を取り「先に乾米數斗を取るも、俱に艾僕に取去せらるる」、粥を煮て遍く諸々の難者に食らはしめ、而る後に自ら食す。

下午に迨ぶも、艾の消息を得ず。徽人は先に舟に附して衡に返る。余は石・曾・艾僕と共に、亦た土人の舟を得て同に衡州に還る。余が意ひは猶ほ「艾は先に歸るならん」と妄意するなり。土舟頗る大にして、而して操する者は一人のみ。流れに順ひて行くと雖も、二十餘里に達する能わず、汨江に至りて已に薄暮なり。二十里にして東陽渡に至るに、已に深夜なり。時に月色再び明かにして、月に乗じて行くこと三十里にして、鐵樓門に抵る。已に五鼓なり。艾使先に返る、艾を問ふに竟に杳然たるなり。

是より先、靜聞余輩の赤身にして水に下り、彼の念經の笈の篷の側に在るを見、遂に留まる。命を捨てて哀を乞ふに、賊之の爲に經を置く。余が竹撞を破り、撞中は俱に書なるを見るに及び、悉く傾けて舟底に棄つ。靜聞復た哀求して拾取し、仍りて破撞の中に置く、盜も亦た禁ぜず「撞中は乃ち《一統志》諸書、及び文湛持・黄石齋・錢牧齋の余に與ふるの諸々の手柬、並びに余が自著の日記・諸々の遊稿なり。惟だ劉愚公に與ふるの書稿は失去せり」。

繼いで余が皮廂を開き、中に尺頭有るを見、即ち闔て袋の中に置きて攜へ去る。此の廂中には眉公の麗江の木公に與ふるの敘稿、及び弘辨・安仁の諸書、蒼悟道の顧東曙輩に與ふるの家書、共に數十通有り。又た張公宗璉著する所の《南程續記》有り。乃ち宣徳の初め張侯廣東に特使たりし時の手書にして、其の族人の珍藏すること二百餘年なるものにして、予苦求して之得るなり。外は莊定山・陳白沙の字を以て之を裹み、亦た書中に置く。靜聞知るに及ばず、亦た乞ふに暇あらず、俱に攜へ去らる。何れの所に棄置するかを知ら

ず、眞に惜しむべきなり。

又た余が皮掛廂を取る。中に家藏の《晴山帖》六本、鐵針・錫瓶・陳用卿の壺有り。俱に重物なり。盗入手して開かず、亟に袋中に取る。

予が大筈を破り、果餅を取りて俱に舳底に投ず。而して曹能始の《名勝志》三本・《雲南志》四本、及び《遊記》合刻十本は、俱に焚し詖る。

其の艾の艸の諸物も、亦た多く焚棄す。獨り石瑤庭の一竹筴のみ竟に未だ開かれず。

賊の行くに瀕し、輒（すみやか）に火を後艸に放つ。時に靜聞正に其の側に留まり、其の去るを俟ち、即ち撲滅するを爲さんとす。而して余が艸口も亦た火起る。靜聞復た江に入りて水を取りて之に澆（そそ）がんとす。賊水の聲を聞き、以て人有りと爲し、靜聞を見るに及びて、兩創を戳して去る。而して火は已に救ふべからず。

時に諸舟俱に遙かに避くるも、而も兩穀舟猶ほ在り。之に呼ぶに、彼反つて遠くに移る。

靜聞乃ち江に入りて墮つる所の篷を取りて筏を作る。亟に經笈並びに余の燼餘の諸物を攜へて、渡りて穀舟に至る。火を冒して再び入りて艾の衣・被・書・米及び石瑤庭の竹筴を取り、又た篷の上に置き、再び穀舟に渡る。第三次に及ぶに、則ち舟已に沈す。靜聞水底より濕衣三四件を取り得、仍りて穀舟に渡る。而して穀舟黒暗に乗じて袖衣等の物を匿し、止だ布衣布被を存するのみ。靜聞乃ち重ねて沙上に移置す。穀舟も亦た開去す。余が輩の江を渡るを守るに及び、石と艾僕と救はるる所の物を見、悉く各々認め去る。靜聞因りて石に謂ひて曰く「悉く是れ君の物か」と。石遂に大いに靜聞を話（はづかし）めて謂ふ「衆人爾涯に登りて盗を引くと疑ふ「哭童を訊（たづ）ぬるを謂ふなり」。汝は眞に不良なり、我の篋を掩（おほ）ふを欲するか」と。知らず、靜聞は彼の爲に刃を冒し、寒さを冒し、火を冒し、水を冒して、此の篋を奪ひ護り、以て主者を待つを。彼は徳と爲さずして、反つて之を話む。盗すら猶ほ僧を憐む、彼更に盜に勝れるか。人の無良、此の如し。

●語注

○鄰舟客戴姓者 三月八日条に、永州祁陽県の白水駅に至り、戴宇完なる人物に、遭難したときに衣服を譲ってくれたお札を言いに行こうとする記事がある。

○裏衣 肌着、下着。

○單褲 一重のズボン。

○昇 物を与える。

○周身 体中、全身。

○耳挖 耳かき。

○事 器物を数える数詞。

○吳門 蘇州の別称。

○二十年前從閩返錢塘江澚 徐霞客は、万曆四八（一六二〇）年、福建の九鯉湖に遊んでゐる（「遊九鯉日記」）。五月六日に家を出て、同二十三日に福建に入るところから記録が始まる。九鯉湖滞在は、六月八日から十一日で、日記には今回の「旅程は六十三日間」であったと記していることから、帰宅は七月八日であろう。丁文江は往路で錢塘江を遡上したのだからとしており、復路も同じルートを取ったのであろう。復路については記事がないが、自注に記したように、身の回りのものを売り払って、ようやく杭州の昭慶寺にたどりついている。

- 腰纏 胴巻き、また身につけている金品。
- 酌 酬に同じ。ムク・ユ。支払う。
- 昭慶 杭州にあった寺院。杭州滞在時の、崇禎九（一六三六）年九月二十九日から十月一日に宿泊している（『浙遊日記』同日条）。
- 艾行可披髮而行、遂至不救 「艾行可は披髮となり結局殺された」というのは、披髮ゆえ行動の自由が妨げられ、逃げ遅れた、ということか。
- あるいは、に逃げられず。
- 衲 綴り合わせるの意。衲衣はつぎはぎだらけの衣。黄珣は破布と注す。
- 囚鬼 囚人となった妖怪、幽鬼。裸に近いほどのぼろをまとい、身体もボロボロの状態を言うか。日本のイメージでは「餓鬼」が近いのではないか。
- 砭 石針で指す。
- 諸人 衆人、ひとびと。黄珣らは、徐霞客一行と解する。
- 《禹碑》 本年二月一日に衡陽城の禹碑亭にあった「七十二字碑」を摸写したもの。
- 《衡州統志》 「遊記」にはここにしか見えない。この文は静聞の言葉なので、別の書物と取り紛れているのかもしれない。
- 襪 布のくつした、足袋。
- 捱覓 黄珣は「逐一尋覓」と注す。あまねく探し求める。
- 其音 艾の消息。
- 銚 柄と注ぎ口がついた鍋の一種。
- 斗 明尺ならば、一斗は十^{トリス}。
- 汧江 車江。十一日条に「爲車江「或作汧江」」とある。
- 念經 声に出して唱えるお経。仏典のことだろう。
- 竹撞 撞では「つく」の意味だが、竹撞で、薄い竹片で作った竹かご。書類を収納することが多かったようである。「遊記」にしばしば出てくる。
- 《一統志》 「大明一統志」。天順五（一四六一）年の成書で、九〇卷。
- 文湛持 文震孟（一五七四〜一六三六）。長州の人。字は文起、号は湛持。天啓二年（一六二二）殿試第一位。魏忠賢らと激しい政争を繰り広げた。「姑蘇名賢小記」がある。「明史」巻二五一本伝。霞客とは親しかったようで、取り交わした詩がたくさん残る（「徐霞客遊記」や「晴山堂石刻」）。
- 黄石齋 黄道周（『浙遊日記』九月十九日条初出）（一五八五〜一六四六）。漳浦（福建省）の人。字は幼元、幼平。号は石齋。諡は忠烈。天啓二年（一六二二）の進士。東林に属し、魏忠賢らと激しく争い、しばしば投獄された。北京の陥落後、明朝復興運動に従ったが、敗れ、とらわれて南京で没した。学問の他、科学や書画にも優れていた。著に「易象正義」などがある。「明史」巻二五五本伝。徐霞客と黄道周との交際は、河内利治『黄道周研究』（汲古書院、二〇二〇）に詳しい。
- 錢牧齋 錢謙益（一五八二〜一六六四）。江蘇常熟の人。字は受之、号は牧齋。万曆三十八年（一六一〇）の進士。東林党に属し、明末には激しい政治闘争にも身を投じた。徐霞客らとも深く交わっており、その生涯を「徐霞客伝」としてまとめている（明末崇禎十六年出版の「初学集」所収）。ところが、黄道周らが、明朝に殉じたのと異なり、南明政権がたおれると清朝に降伏し、仕官した。「明史」の編纂に関わるなど、清朝でも高官と

して長く活躍した。しかし乾隆帝に嫌われ、その著は全て焼却処分となる。既に出版されている書物でも、彼の著述は抜き出されて破棄された（抽禁）。彼の「徐霞客伝」もそのために翻弄された。「清史稿」巻四八九本伝。

○手束 手紙、私信。

○劉愚公 不詳。「江右遊日記」十一月十七日条に「作錢・陳・劉諸書」とある。錢は錢謙益、陳は陳繼儒であろう。「晴山堂法帖」掲載のひとりに劉若宰というものがいる。このものであれば、字は蔭平。南直隸潛山の人で、崇禎元年（一六一六）の進士で、左諭徳を務めた。

○書稿 劉愚公への書簡については、「粵西遊日記三」九月二十四日条に、右江と左江が合流して郁江（海に注ぐ珠江の上流）となる場所で、右左両江について考察する自注がある。そこには「余昔有辨、詳著於《復劉愚公書》中。其稿在衡陽遇盜失去。」とある。おそらく「盤江考」のような川筋に関する論考であつて、劉愚公へあてた書簡の形式を取つた小論文だったのであろう。

○皮廂 廂は箱。大型のはこ。

○尺頭 絹織物。

○眉公 陳繼儒（「浙遊日記」九月二十四日条初出）（一五五八〜一六三九）。松江（上海）の人。字は仲醇、号は眉山、麋公。出仕せず、在野にあつて著述や出版活動を行った。徐霞客とは親しく、彼の西南遊に先だつて、先ず余山に繼儒を訪ね、別れのあいさつをしている。「啓禎野乘」巻十四・「明史」巻二九八本伝。

○麗江木公 木増（一五八七〜一六四六）。納西族の名は、阿宅阿寺。十一歳で雲南麗江土司を継ぐ。雲南を訪ねた徐霞客を歓待し、保護をあたえた。いくつかの別集を編纂しており、そのひとつ《山中逸趣》に、徐霞客が序を寄せている。

○弘辨・安仁 鷄足山悉曇寺の僧侶。「浙遊日記」九月二十四日条に、陳繼儒が、徐霞客のために、この二人の僧侶にあてた紹介文を書いたことが記されている。「滇遊日記五」十二月二十三日条に、鷄足山の悉曇寺に至つた徐霞客に対し「弘辨安仁二師迎飯於方丈」とある。

○蒼梧道顧東曙 「浙遊日記」九月二十日条に「（王）孝先以顧東曙「時東曙爲蒼梧道、其乃郎伯昌所寄也」家書附彙中」とあり、蒼梧（湖南）の道員であつた顧東曙へあてた、息子の顧伯昌からの手紙をあずかつたようである。そしてこの手紙は今回盗賊に持ち去られた。「粵西遊日記二」七月二十七日条に「先是蒼梧道顧東曙「名應暘」、余錫邑人也、其乃郎以家訊寄來、過衡陽、爲盜劫去、余獨行至此、即令其仍駐此地、亦將不及與通、況其遠在蒼梧耶」、同八月十五日条に「時州守爲吾郡諸楚餘、有寄書者、與鬱林道*顧東曙家書俱置篋中、過衡州時爲盜劫去」とある。

*八月十五日条には、蒼梧道ではなく鬱林道となっている。

○宣德初 明宣宗の年号で、初年は西暦一四二六年。

○莊定山 莊昶（一四三七〜一四九九）。字孔暘、号木齋等。江浦（江蘇）の人。成化二年（一四六六）の進士。翰林檢討などを歴任するが、謫されたことをきっかけに帰隱。江蘇江陰の定山に居を構え隱遁すること二十余年であつた。人は定山先生と称した。弘治年間（一四八八より）一旦公務に復帰したが、やがてやめ、卒す。諡は文節。「莊定山集」がある。「明史」一七九本伝、「明儒学案」四五。

○陳白沙 陳獻章（一四二八〜一五〇〇）。字は公甫、号は石齋、白沙先生と称された。広東省新会県白沙里の人。正統十二年（一四四七）、挙人となるも、ついに進士には及第しなかった。任官せず、故郷で学問にはげんだ。その学風は、静座により主体の確立を求めるもので、朱子学から距離を置くものであり、のちの王陽明の先駆とされる。「白沙子全集」がある。「明史」二八三本伝、「明儒学案」五。

○字 字帖、すなわち法帖（習字のお手本）であろう。

○掛廂 鍵がかかっている鞆。あるいは肩掛け鞆か。

○《晴山帖》 晴山堂法帖。泰昌元年（あるいは万曆四十八年、一六二〇）、徐霞客は、母王夫人の大病全快を祝って自宅の敷地内に「晴山堂」を建造させた。そしてそれまでに集めた明代の詩文の名筆を、三方の壁に石刻として残す事業を行った。さらに天啓四年（一六二四）、八十歳となった王夫人を言祝ぐため、「秋圃晨機図」という徐霞客が機織りをする王夫人に仕えている絵画が描かれ、それに題するかたちで霞客と親交の深かった名士たちが祝福の詩文をよせた。それらも石刻に加えられ、最終的な竣工は崇禎六年（一六三三）であった。この石刻の拓本が「晴山堂法帖」である。呂錫生・薛仲良『晴山堂法帖』（中央文献出版社、二〇〇六）があり、何平『中国碑林紀行（二十九） 徐霞客ゆかりの晴山堂石刻』（『人民中国』五五一号、一九九九・五）で、石刻の紹介をしている。

○陳用卿 明代の万曆から天啓崇禎年間に活躍した焼き物職人の名人。紫砂泥という特殊な素材を用いた紫砂壺の作家として有名だった。

○筥 四角い蓋のある竹籠。衣類や食品などを入れた。円形の竹籠を篋という。

○曹能始 曹学佺（一五七四〜一六四六）。字は能始、号は石倉など。侯官（福建省福州にの県）の人。万曆二十三年（一五九五）の進士。天啓の間広西参議などを歴任するが、弾劾され下野。崇禎帝が殺され唐王が立つとそれに従軍したが、明の滅亡とともに自殺した。諡は忠節。徐霞客と親しく、「晴山堂法帖」にも名を連ねている。諸学に通じたが、地理にも詳しく、「大明一統名勝志（別名「大明輿地名勝志」）二百八巻や「蜀中名勝記」三十巻などがあった。

○《名勝志》三本 おそらく前注の「大明一統名勝志」であろうが、三巻とあれば、広西や雲南といった部分を抜き出していたのではないか。

○《雲南志》四本 黄坤は、唐樊綽の「蠻書」ではないか、と推測する。雲南の地誌で、元十巻。明代に散逸したが、清代に輯逸本が作られた。

○《遊記》合刻十本 不詳。

○紬衣 紬は絹に同じ。絹衣は絹織物。

○布衣 麻や綿の粗末な服。

○布被 粗末な寝具。

●口語訳

[十二日]

《9》衡州府へ生還

●戴某から衣服を譲ってもらった

隣の舟の客で戴という姓の者が、私をたいそう憐んでくれて、自分の肌着と一重のズボンそれぞれ一着を私に分け与えてくれた。私は身に何一つまっていなかったが、髻の中

を探ってみたところ銀の耳かきが一本あった。「私は平時は簪を用いない。(ただ)今回の旅行で蘇州に至ったところで、二十年前のことを思い出した。福建(の九鯉湖)から錢塘江の水辺まで返ってきたところで、路銀が尽きてしまったのだ。そのときはたまたま髻に刺していた簪一刺しがあり、それを売って、半分は食費にあて、半分を使って輿を雇い、そこでやっと杭州の昭慶寺の金心月和尚のところへたどり着くことができた。そこで今回の旅遊では簪の代わりに耳かきを一本用意しておき、ひとつには髪に挿して用いるため、ひとつには臨時の緊急事態への備えとしていたのだった。今回、湘江に落下する羽目になったわけだが、幸いなことにこの物ははずれることもなくて、髪もばらばらにならずにすんだ(しかも命を長らえた)。しかし艾行可はざんばら髪になって水中を逃げ回り、結局救われることはなかった。簪という小さな物ではあるが、(その有無によって死生を分けるとは、)まことに天意、天命というべきであろう」。そこで、それを報酬として与えた。あわただしく、その姓名だけを問うて(おそらくお礼を言って)別れた。

● ようやく身繕いができる

その時、顧僕も裸で身にまとう物を持たなかった。そこで私は、戴氏から与えられたズボンと顧僕に与え、自分ももらった肌着を着た。しかしその肌着は腰までの長さしかなかった(下半身はすっぽんぽんであった)。旁らにいた水主が一切れの破布を私にくれた。そこでそれで下半身の前部を覆った。そうして身繕いができ、やっと岸上がった。

● 助かった一行

上陸した岸は、まだ湘江の北東の岸だった。そこで岸に沿って北に行く。その時、一緒に上陸したのは、私と顧僕、石瑤庭と艾行可の下僕、及び徽州からの客が二人、合計六人の一行で、みな幽囚の鬼怪のようで、およそ人間らしからぬ「餓鬼」のような姿であった。

● ポロポロの体で行方不明者の搜索

裸の体には明け方の風が骨にしみ通るほど冷たく、靴もない足を砂礫が突き刺さって裂く。寒さと痛みで、前に進もうとするがそれはならず、かといって止まろうとするがそれもならない。(それでもよろよろしながら)四里進むと、空が漸く明るくなってきて、強奪されて燃やされた舟が、湘江を隔てたところにあるのが見えてきた。川上や川下にもたくさん船がもやっていたが、われわれのひどい姿を見て、だれも渡江してくれようとはしない。繰り返して泣き叫びながら頼んだが、われわれを信じてくれるものはだれひとりいなかった。艾行可の下僕は川を隔ててその主人を呼び、わたしは川を隔てて静聞を呼び、徽州の客もまたその同伴の仲間呼んだ。それぞれ呼びかけたが、一人としてこれに応じるものはいなかった。

● 静聞との再会

そうこうしているうちに、私の名前を呼ぶ声が聞こえた。わたしはこれは静聞だ、と分かった。心の中でひそかに喜び、「われわれ三人はみな無事だった」と言った。速やかに静聞と遇いたいと思っていると、湘江の対岸にいた地元民が、船を出してくれて私を渡河させてくれた。

燃えている船に至り、遙かに静聞の姿を認め、喜びを更に増した。そこで川に入って、昨日川に投じた竹の箱を探し求めようとした。静聞は私の行動を眺めて、何をしているのかと問い、遠くから私に呼びかけて言った。「箱はここにありません。しかし箱の中にあつた資金はなくなっていました。手書きで書写した《禹碑》と《衡州統志》は、まだ濡れず

にすんでいます」と。

対岸に登ると、静聞が燃える船から何件かの衣類や竹かごを救出しており、それらを沙岸に置き、側で見守っているのが見えた。私が凍えているのを見て、急いで着ていた衣を脱いで私に着せてくれた。さらに私のズボン一本と足袋一足を救出していた。それらは、火で焦げ、水に浸っていたので、燃え残りの熾火であぶって乾かした。

●なお行方知れずの艾行可

この時点で、徽州の客五人はみな無事であった。艾氏一行の四人は、二人の友人と下僕は怪我はしていたが生存していた。ただ艾行可本人だけは行方が分からなかった。そこで艾の二人の友人と下僕とで、地元の人に船を出してもらって上流下流に手分けしてあまねく探し求めた。われわれは河岸の砂州で衣服を乾かすことにし、消息が伝えられるのを待つことにした。

●やっと粥にありつく

時にとても空腹だったが、鍋釜の類いは全て燃えつきていた。すると静聞が川に潜ってひとつの鉄鍋を見つけてきた。静聞は再び川に潜り、湿った穀物数斗を得た。「先に乾いた穀物数斗を取っていたのだが、それらはすべて艾氏の下僕に持ち去られてしまった」。その穀物で粥を煮、遭難した全ての人々に食べさせ、自分は最後の残りを食べるのであった。

●一旦衡州城へ帰還

午後になつたが、艾行可の消息は分からないままである。徽州の客たちは、一足先に船に乗って衡州城に戻った。私は、石瑤庭、艾行可の友人の曾某、艾行可の下僕と一緒に、徽州の客と同様に地元民の船を雇って衡州城に還ることとした。私は「艾行可は先に帰っているだろう」と根拠もなく考えた。

地元の船はたいそう大きかったが、操舵者は一人しかいない。(そのため船の運航がスムーズではなく)川の流れに順って下っているのだが、二十里あまりも行かないうちに、車江のところすでに薄暮になった。さらに二十里で東陽渡に至るころは、もはや深夜であった。そのころ、月が再び出てあたりを明るく照らすようになった。その月明かりの中を三十里進み、ようやく衡州城の鉄樓門に到着した。時はもはや五鼓(あけがた)であった。艾行可を捜す使者が先に衡州城に戻っていたので、消息を聞いたが、結局全く分からないとのことだった。

《10》静聞が語る事の顛末

●僧侶とお経には手を出さない盗賊

この時よりも前のことだが、静聞は、私たちが裸で川に飛び込んでしまったが、彼のお経を収めていた竹の背負子が小舟の屋根の側にあるのを見て、ついに逃げずにそこに留まることを選択した。命を省みず懇願したところ、盗賊はお経には手をつけなかった。

●蹂躪される徐霞客の荷物(旅行の携帯品が分かる)

盗賊は、私の竹籠を壊したが、籠の中には書籍や書類の類いばかりだったため、籠を逆さまにして中身を船底にぶちまけた。それを静聞が懇願しながら拾い集め、壊れた竹かごの中に収納した。盗賊はそうした静聞の行為も禁じなかった。「籠の中身は『大明一統志』などの書籍類、及び文湛持・黄石齋・錢牧齋が私に寄せてくれた手紙、そして私が綴ってきた日記と様々な遊記の下書きであった(これらは無事であった)。ただ劉愚公にあてた書簡体の小論の草稿はなくなっていた」。

盗賊は次に私の革製の鞆を開き、中に絹織物があるのを見つけると、すぐにそれらすべてを、(持参した、あるいはそこらにあった)袋の中に入れて持ち去った。この鞆には、陳繼儒が麗江の土司木公にあてた敘文の原稿、さらに陳繼儒が雲南鷄足山の僧侶弘辨と安仁にあてた書簡、蒼悟道の顧東曙輩にあてた顧の家族からの書簡、すべてで数十通があった。さらにまた、張宗璉が著述した『南程統記』があった。この書は、宣徳年間の初め、張侯が広東に特使として派遣されたときに作成された自筆稿本であり、張侯の一族が二百年あまりのあいだ珍藏していたもので、私がその一族に懇願して入手したものである。莊昶と陳猷章(陳白沙)の法帖でつつみ、書簡の中にまじえてしまっておいたものである。静聞はそうとは知らず、またお願いして留めてもらおう暇もないままに、すべて持ち去られてしまった。どこかにうち捨てられたのではないか、と考えると、まことに痛ましく残念なことである。

盗賊はさらに私の掛箱(鍵つき鞆)も手にした。中に家藏の『晴山堂法帖』六卷、鉄針、錫製の瓶、陳用卿作の壺があった。いずれも貴重な物である。盗賊は鞆を手にしたものの蓋を開けることが出来ず、早々にそのまま袋の中に入れた。

盗賊はさらに私の大型衣装ケースをぶちやぶり、なかにあつた果実や餅を手にとってみんなら船底に投げ込んだ。そして曹学佺の「名勝志」三卷、「雲南志」四卷、及び合刻「遊記」十卷は、すべて灰燼に帰したのであつた。

艾行可の船艙の各種物品も、ほとんどが燃え尽きていた。ただ石瑤庭の一つの竹籠だけが、未開封のままに残されていた。

●盗賊の放火と静聞の負傷

盗賊は立ち去るに際し、すぐさま後ろの船室に火を放った。その時、静聞はちょうどその側に留まっていた、盗賊が立ち去るのを待って、すぐさま火を消そうと思っていた。ところが我々の船室の入口からも火の手が上がった。そこで静聞は再び川に入り、水をくんで火に注いで消そうとした。すると盗賊の一人が、静聞が水に入る音を聞きつけ、まだ人がいると思ひ(戻ってきた)。そして静聞を見つけると、二度切りつけてから立ち去った。静聞は負傷し、結局火を消すことはできなかった。

●必死で遺留荷物を回収する静聞

その時、もやっていた船たちは遙か遠くに避難していたが、二艘の穀物船はなおそこに留まっていた。静聞が声を掛けたが、その船は(助けに来るところか)返って遠くに移動していった。静聞はそこで川に入り、落ちていた小屋の屋根で筏を作った。すみやかにお経を収めた籠や、私の燃え残りの物品などを拾い集め、川を渡って穀物船に持って行った。

さらに燃える火のものともせずに再び船に入り、艾行可の衣服、寝具、書籍、穀物、及び石瑤庭の竹籠を取り、また篷の筏の上に置いて、再び穀物船に運んだ。荷物の回収を行うこと三回目で、私たちの船は沈没した。静聞は川底から湿った衣を三四枚拾い上げ、穀物船に渡った。

●遺留荷物を船人に盗まれる

すると、穀物船の人が、暗闇に乗じて私たちの絹織物等を盗み隠してしまった。残っていたのは粗末な衣服と寝具だけだった。静聞はそこで残った荷物を重ね、河岸の砂州に移動した。穀物船も離れていった。そして私たちが川を渡ってくるまで荷物を守って待っていたのだった。

●石瑤庭の非道な振る舞い

石瑤庭と艾行可の下僕は、救出された物品を見て、それぞれ自分のものだと思つて全て持ち去つた。そのとき静聞が石瑤庭に「これらはみなあなたの物ですか」と問うと、石瑤庭は大いに静聞を罵つて言った「みんな、おまえが岸に登つて盗賊を引き込んだと疑つてゐるぞ」「静聞が、泣いている子どもにわけを尋ねたことを言っているのだ」。おまえは本当に悪いやつだ。私の荷物を覆い隠そうとしていただろう」と。石瑤庭は全く分かつていない、静聞が彼のために、刃に身をさらし、寒さをもとせせず、燃えさかる火をかいくぐり、川をおし渡つて、彼の荷物を奪還して保護し、持ち主に返そうとしていたことを。それを彼は感謝するどころか、かえつて静聞を罵るとは。

盗賊ですら、僧侶である静聞に対し情けをかけた。石瑤庭は、盗賊にも劣るやつだ。人心の荒廃、ここに極まつた。

「二月十三日」

《概要》衡陽城へ戻つた霞客は、同郷の金祥甫を頼り、身を落ち着けることができた。

■本文の部

十三日

味爽登涯、計無所之。思金祥甫爲他郷故知、投之或可強留。候鐵樓門開、乃入。急趨祥甫寓、告以遇盜始末、祥甫愴然。初欲假數十金於藩府、托祥甫擔當、隨托祥甫歸家取還、而余輩仍了西方大願。祥甫謂藩府無銀可借、詢余若歸故郷、爲別措以備衣裝。余念遇難輒返、「缺」覓資重來、妻孥必無放行之理、不欲變余去志、仍求祥甫曲濟。祥甫唯唯。

■訳注の部

●訓訳

十三日

味爽に涯に登る。計るに之く所無し。思ふに金祥甫は他郷の故知たり。之に投じ或ひは強ひて留るべし、と。鐵樓門の開くを候ち、乃ち入る。急く祥甫の寓に趨り、以て盗に遇ふの始末を告ぐ。祥甫愴然たり。

初め數十金を藩府より假り、祥甫に擔當を託し、隨ひて祥甫に家に歸りて取り還るを託す。而して余が輩は仍りて西方の大願を了へんと欲す。祥甫謂ふ、藩府に銀の借すべき無し、と。余に詢るに、若し故郷に歸るならば、別れのために措くに衣装を備ふるを以てせん、と。余念ふ、難に遇ひて輒ち返れば、「缺」資を覓むること重來すれば、妻孥必ず放行する理無くして、余が去るの志を變ずるを欲せざらん、と。仍りて祥甫に曲げて濟を求む。祥甫唯唯たり。

●語注

○愴然 悲しみいたむ、心をいためる。

○擔當 任務、責任を負う。担保となる、保証人となることか。

- 隨 あとから。
- 托祥甫歸家取還 かなり意識した。
- 措 ほどこす、取り計らう。
- 「缺」 このくだり、欠文があることもあり、よく分からない。
- 妻孥 妻子。
- 放行 自由に行かせる。
- 曲 曲意の意味。自己の気持ちをまげて。
- 濟 救済する。徐霞客を助けてくれ、ということ。
- 唯唯 丁寧な返事、はい。あるいは、のらりくらりと言葉を濁すさま。

●口語訳

〔十三日〕

《12》同郷の金祥甫に救済を頼む

未明に岸に登る。考えたが、どこに行く宛てもない。そこで思ったのは、金祥甫は他郷にいる旧知の間柄である、彼のところに身を寄せ、なんとしても逗留させてもらわねば、と。鉄楼門が開くのを待って、衡陽城に入城する。急いで金祥甫の寓居に赴き、盗賊に襲われたことの顛末を告げた。金祥甫は悲しみいたんでくれた。

私ははじめ、桂王府から数十金を借用し、金祥甫に保証人をお願いし、さらに、あとから金祥甫が江陰の家に帰ったときに、(借用した代金を私の実家で用意し、その金を金祥甫が)受け取って、衡陽城に持って帰るようにお願いした。そうして私たちは西へ向かう大願の旅を終わらせるのがよいだろう思った。すると金祥甫が言うには、「桂王府には貸せるような銀はない」と。そして私に、もしここで故郷に引き返すのならば、送別として、いろいろと取り計らって衣服や装備を整えてあげてもよい、と進めた。私は考えた「困難に直面するたびに引き返していたら、「缺」何度も資金をもとめるようなことになれば、妻子は、私が自由に旅に出るのを行くのを認める理由がなくなるが、かといって私の行きたいとする気持ちを変えらることを望まないだろう、と。そこで金祥甫に、ここはひとつ志を曲げても助けてください、と頼み込んだ。金祥甫は「はいはい(あるいは「はい」)と言った。

(第三部へ続く)

薄井俊二訳…二〇二五年三月十一日